

事なれば、其御憤深くして、共に死なんと御歎き有るも理なり。其後大坂鎧の御吟味之節、西尾隼人と争ひ不首尾成るに付、達上聞給ひて流刑被仰付。御尤の仕合哉。近年安藝の福嶋左衛門大夫殿、越前の一伯殿、駿河大納言殿、越後の上總殿、何茂當家御一門の棟梁といへども、政道には無私、心の欲する處に隨へばのりを越えずとの古人の言葉も有りとなん。隠岐一人に限るべからずと語りければ、何れも舌を振はせりと云々。按ずるに、三州志にいへる菅家見聞集の察按とは、則ち右の傳説の事なるべし。菅家見聞集には、之を寛永十年の事とす。今枝直方筆記には、安見隠岐大坂一戦の節裁許あしき事、大坂陣二度目の御穿鑿の時悪に相究りて、後江戸御在府之節、爲御禮以使者年頭の御太刀を獻する刻御請不被成。其秋の初隼を一居任例上げれば、是をば御請被成て、翌年御歸國なさるゝと等しく能州へ被遣しと。又云ふ。安見隠岐を能州嶋へ被遣刻、奥村因幡を以被仰渡。其時分山城・安房にも御しらせなかりしゆゑ、山城氣分はあしく、小袖をはをり、小脇指をさして出でけるなり。依つて後まで、少しも御しらせなくてかや

うに被仰付事不快とて、御つりに思ひしと也。此の時若し違背せば、横山大膳・式部津田支蕃に踏つぶし可申よし被仰付。とあり。是等も其の時代の事共をば聞傳へたる傳話なるべし。但し隠岐が罪狀の慥成る事は、いまだ記録共に見當らず。

○安見隠岐砲術傳話

武家耳底記に云ふ。稻富伊賀は細川家の士にて、鐵炮の名人なり。其頃天下に三人といはれたるは、田付宗鑑・安見隠岐・稻富伊賀なり。目をくゞつて的を打つにはづすことなし。或は家の内にありて、鳥の聲を聞きて鐵炮を打つに、屋根を打抜きて鳥を打落す。誠に古今の名手、さげ針・釣風をも打つべし。安見隠岐は、加州の士なり。鐵炮の業、稻富と名を等しくす。腰だめの妙を得たり。殊に稻富と違うて、強力の大功の者にて、歌學にも達し、第一能書なり。大坂陣の節、敵に組みしかれたり。敵脇差を抜きて隠岐が首を掻かんとするを、隠岐甲の忍の緒を兩手を以て強く引いてかゝれば、此間に右の手の大指・小ゆびを残して、中指三本を切落されたる處へ、味方助け來り、終に敵を打ちて

隠岐を助けたり。後隠岐人と手綱引をするに、大指と小指とにて手綱の端をつまみ居て、人と争ふに負くる事なし。吉田大藏は弓の名人なり。是と鐵炮にて中りをあらそふに不負。希代の妙手なり。但し勇氣にほこりて惡事増長し、大坂陣にも西尾隼人と鎗の前後を争うて、其首尾惡し。爰を以て、能州嶋の地へ蟄居して、身終にをはり家斷絶せりと。又混見摘寫に云ふ。瑞龍公越中守山に在城し給ふ頃、鷹野に御出被成、鴨を以て御拳にて翁被成ける處、造作もなく鴨を捉へぬ。天晴とつたと御機嫌の處、鶯飛下り、件の鴨を鴨と共につかんで、虚空にかけり行き去りぬ。利長卿大きに御怒り、御指添の五寸五分藤四郎吉光の小脇刺を、手裏劍に被成けれども、遙に飛行きて、御脇刺は空敷島の中に落ちにけり。扱安見右近を召され、汝日比の修行此の時なり。命限り件の鶯を追詰め、鐵炮にて可打上。それ／＼と以ての外御せきの御容躰。安見鐵炮の名人といへども、難心得存ずといへども、御氣色尋常ならねば、長りて秘藏の殺生筒を爲持、息を切つて追行き、或は山に隠れ、森にさへられ、其の影を見失ひ、心のやるせもなく、

行衛不知もかけ行く程に、道の程登里餘を過ぎて、兎ある山の、しかも岨立ちたる岸洞の上に、谷へ向つて顯れたる自然石の上に、件の鶯とおぼしくて羽を垂れたり。あわや天の引合かと、遙に見やりたれば、彼鷹を掴みながら折々是を食ふ躰なり。眞中を打ちて御感に可預とおもへども、漂々たる淵の邊に其の身は立ち、其間目も及び難き程なりけり。さればとて谷へ下りて寄らんとせば、定めて鶯は飛び去るべし。是より打つとも、千に一つもあたるべからず。如何せんと思ひ煩ひけるが、いや／＼間合は遠く中らぬは是非もなし。近く寄つて、鳥をあげさせては不調法。南無八幡と祈念を凝らし、拾刃玉を二つ込め、強藥をしたゝか仕掛け、岩上に膝臺にて、忘るゝ許ため込んで是を打つ。鶯は鶯を打たれて、岩上より鳥を掴みながら、遙の谷へぞ落ちたりける。下人ども、木の根、葛かづらに取付き、半時許辛苦して、思ひのまゝに取得て、頓て御覽に備へければ、御感悦大方ならず。其間合を繩張して、後代の傳へにせよと御意に依つて、取らせ見るに、其間貳町五段也。彌・奇異の思召にて、則御召の黒羅紗の御羽織を御直に被下、重ね